

II 退官にあたって

—ニホンザルの集団遺伝学—

野澤 謙

1973年に刊行された「霊長類研究所年報」Vol.3に、私は「総説——霊長類学への展望——，集団遺伝学の立場から」と題して一文を載せている。この研究所の一つの研究パートとして集団遺伝学の研究室が生まれて3年目という、スタートラインからいくらかも走っていない時期に、自分がこれから行うべき研究の展望を試みたものであった。それから18年を経過し、定年退職を間近にひかえた私は、広報委員会から再びこの年報への執筆を要請されている。これは18年前の公約がどの程度果されたかの自己検証が求められているのであろう。

集団遺伝学は進化の遺伝学的メカニズムの解明を目指す学問分野であって、遺伝子突然変異率、移住率、淘汰圧および集団の有効な大きさという4つの集団遺伝学的パラメーターが与えられたときに、どのような遺伝子頻度がどのような確率で期待されるかという数学的理論が構築されている。霊長類にこれを適用するためには、これら4つのパラメーターが霊長類各種でどのような値をとるのかを見究めなければならない。またそのためには集団中での遺伝子ダイナミクスを測る遺伝的変異、つまり遺伝標識として何を使うかを出発点において決めておかなければならない。

遺伝標識として私は血液蛋白の構造を支配する遺伝的変異を使うことにした。家畜の毛色多型のように簡単に判定ができる遺伝的変異が何種類もあればそれを使ったであろうが、野生動物のサルにそうした変異はほとんど見られないからである。そのために出自の明確なサルから採血するという、同僚研究者の理解と協力がなければ実行不可能な手段をとることが必要であった。20年余りの間に血液試料数はニホンザルだけで3千頭を越え、各種霊長類の合計では1万頭を越えている。これは貴重なコレクションで、遺伝学分野ばかりでなく、他分野の研究にも活用されている。また血液を持っているだけでは仕方がないのであって、これを使っ

て遺伝的変異の分析方法が開発されなければならない。庄武孝義、川本芳両博士を始めとする研究者諸氏の努力によって、現在私達の研究室では30を越える蛋白遺伝子座について電気泳動的分析がルーチンにおこなわれている。

この多座位電気泳動法によって発見される遺伝的変異の生起確率、すなわち遺伝子突然変異率は根井正利博士が私達のニホンザルのデータを使って推定した結果によれば、世代当り 2×10^{-6} 前後の値となり、これは同博士がYanomama インディアンについての多座位電気泳動データを使って推定した結果と大差はない。また、これまでヒトの遺伝病やショウジョウバエやマウスの致死や可視突然変異率として常識的となっている値、 $10^{-6} \sim 10^{-4}$ 、の範囲内にある。さらに、この程度の率で生じる電気泳動的変異が自然淘汰に対してどの程度の感受性をもつかが木村資生博士が提唱する中立説との関連で関心をもたれ、ニホンザル集団内で種々の統計的検定がおこなわれたが、変異の中立性を否定するような結果は得られていない。つまり大部分の遺伝子座において、各遺伝子型の適応度は1にごく近い値をとっていると推定される。

多座位電気泳動法によって知ることができるニホンザルの遺伝的変異性——つまり変異の大きさ——は他種哺乳類に比べて一般に低いし、他種のマカカ属、例えば川本博士が取組んだカニクイザルや庄武博士が調べたトクモンキーなどと比べてもより低レベルにある。それと、もう一つ重要なことは、変異が種全体に均等に配分されているのではなく、地域によって異った変異遺伝子が著るしく異った頻度で分布していることである。ニホンザルの分布域は日本という多島地域であるが、生息する島が異ればもちろん、たとい同じ島であってもせいぜい100kmも離れて生息する2つの群れは相互に無関係と言えるほどに違った遺伝子組成をもっている。遺伝的変異の地域局在性という事実はニホンザルの保護を考える際にも、またニホンザルを実験動物として利用する観点からも重要な意味をもっていると思う。同じ日本列島に棲んでいる日本人や日本ネコについて同様な調査を

おこなって見ると、遺伝的変異は生息域全体にわたりほぼ均等に分布しており、地域局在性というような性格は認められない。またこの性格が少くともマカカ属サルに通性と考えられることは庄武博士や川本博士の調査からも明らかである。

ヒトやネコとニホンザルとの間の集団としての遺伝子構成上のこうした違いは、それぞれの動物種における繁殖単位がどのレベルの個体群であるか、そして繁殖単位間の個体交換、すなわち遺伝的移出入率の違いによって生まれていると考えられる。

ニホンザルの群れの遺伝学的有効サイズは、雄の性行動の統計学的な研究から、だいたい群れの総個体数の $\frac{1}{2}$ 程度となることがわかった。しかし群れは社会的単位ではあっても繁殖単位ではない。主に成体雄の頻繁な群間移動によって、隣接する群れはほぼ等質の遺伝子組成をもつに至っており、数個ないし10数個の隣接群の集まりが一つの繁殖単位を構成していると考えられる。こうした繁殖単位間の遺伝的移出入率は低いもので、繁殖単位の有効サイズ、つまり繁殖単位を構成する群れの有効サイズの和の逆数以下のオーダーと推定される。

ニホンザルはマカカ属の中のカニクイザル種群を構成する一種であるが、蛋白変異を標識にして種間遺伝距離を求めると、ニホンザルに最近縁の種はアカゲザルである。根井博士の方法でアミノ酸置換率から両者間の分化時期を推定すると約50万年前という値が得られる。この前後の時期にアカゲザルに近いマカカ属サルの個体群が大陸から陸橋を通して渡来移住し、陸橋の海没によってこの地域に封じこめられ、ニホンザルの祖先となったのであろう。彼等の子孫が陸地伝いに北海道を除く日本全域に分散し、陸地が海没することによってそれぞれの島にニホンザルの集団が確立され現

在に至っていると推測される。

ニホンザル地域集団間の遺伝的分化は、ニホンザル・アカゲザル間の遺伝距離のたかだか $\frac{1}{2}$ であって、分布の中心部に近い大部分の地域集団がたがいに分化したのは2万5千年前以降と推定される。最も大きい遺伝的分化を示す地域集団は、北限下北半島に生息する集団で、屋久島のサルや房総半島のサルがそれに次ぐ。これは現在承認されているニホンザルの亜種分類とは違った分岐パターンと言うほかはない。ニホンザルの大部分の地域集団にとって、同亜種の下北のサルより、亜種を異にするヤクシマザルの方が遺伝的には近いことを意味するからである。同じようなことが川本博士が調査したカニクイザルにも認められるので、マカカ属の亜種分類、種分類は遺伝学的な知見を加えて再検討すべきだと思われる。

中国大陸産のアカゲザルを outgroup とすると、ニホンザルの32蛋白遺伝子座において見出された計68個の対立遺伝子は、40個の祖先型遺伝子と28個の派生型遺伝子とに分類される。派生型遺伝子はこの列島地域にニホンザルの祖先集団が定着して以後に突然変異によって生まれた遺伝子であるから、地域集団間で保有数の差違は大きく、特に分布域の南部に位置する地域集団で保有数が少い傾向がある。また屋久島や下北半島や房総半島のような生息域の周辺部に限って特有の祖先型遺伝子が高い頻度で分布しているという事実があり、このことは現在のニホンザル地域集団が二波あるいは多波の渡来ないし分散によって成立している可能性を示唆しているのではないかと考えられる。

過去21年間、この研究に従事中、多数の霊長類研究者の方々から手厚い援助を受けた。退官にあたり、これらの皆様にあらためて深く御礼を申し述べたい。

江原昭善

「思想には感情がある」といったのは、文豪ドフトエフスキーである。たしかに思想や世界観や人間観には、その基層に知的成長の過程が反映しており、それらが個人的経験や時代的制約から自由でありえないことも、その証のひとつと考えてよいようである。そしてそのようにして各国の思想が形成されるのであろう。とくに学史をひもどくまでもなく、純粹に主観を排除し客観を重視する自然科学の世界でさえ、事実の解釈や学説の対立をめぐって、あるいは激しい論争のなかに、同じような傾向が見受けられる。いうまでもなく自然科学を自然科学の枠内に留める限り、理論的には対立もやがて一元化されることだろう。しかしひとたび自然科学の枠からはみ出て、人文・社会科学の領域に足を踏みいれなければならないときはどうであろう。あるいはまた、自然科学者も人間であり、現実に生活する人間であるかぎり、みずからの知的経験を自分自身の日常の生活や世界観や人間観に投影させるのは、ごく自然な成り行きだといわずばなるまい。それ故「人間」そのものに焦点を合わせた研究に携わるものにとっては、このところは目を塞いで通るわけにはゆかない。

研究の活発な自然科学の殿堂のひとつである霊長類研究所で、あえてこのような、異端的とも誤解されかねない内容をテーマに選んだのも、その背景には上記のような問題意識があったのである。

人類学への軌跡

筆者が育った世代は俗にいう戦中派に属し、大戦後は新旧パラダイムの移行期として精神的に大きく翻弄された世代である。もっとも村上兵衛(1965)によれば「ヨーロッパでいう文化的風土のなかには“戦中派”というような思想的あるいは情緒的な世代感情を育てる湿度がない」と指摘し、同じく大戦を経験したドイツその他の国の西欧的感覚のなかには、このような意識は見当らないという。しかし大戦を機に世界史的パラダイムの転換があり、そのままに移行期にあったことはまちがいあるまい。

筆者が物心ついたときには、日本はすでに大戦へと加速度的に急傾斜して行きつつあった。立ち居振る舞いはおろか、ものの考え方も画一化され統制された時代だった。その根底には「形整わば、意おのずから備わる」という意識があった。敗戦から復学した旧制高校では、弊衣破帽に象徴されるように外観や形よりも「精神」が重視された。このような面にまで180度の精神的転換が要求された。そしてそれは、ひとり筆者だけではなかった。当時の日本全体が価値観・思想体系のパラダイム・シフトの只中であつたのである。その時期に漠とした不安と同時に、留まりなく動き求める人間の精神や心の不思議さに、そしてつまるところ「人間」に興味をもった。未だ学問的事情など理解できるほどには精神的に成長してはいたわけではないが、将来は人間そのものも含めて、そのようなことを研究したいと考えていた。

現在でもしばしば、人類学を志した動機は、ときかれる。せいぜい上に述べた程度以上に、はじめから確固たる方針があつたわけではない。ただ、多くの選択肢のなかから、拒否的な道を回避しながら、残された選択肢をアミダ籤のように辿ってきた結果、こうなつたというのが実情であろう。それゆえ、人類学という巨大な建物の正面玄関に辿りついたとき、その膨大な間口をもつた建物の前に立って、どの入口を選択すべきか、迷いに迷つた(呆然とした)のも事実である。

しかし筆者は先輩や同僚に恵まれた。同じような道を歩もうとするものにとって、お互いに忌憚なく議論し合える研究室の雰囲気は、研究そのものではないが、個人の思考力や学問的成長には大きな土壌になる。そしてこのような経験を通して、各々の思想や学問的立場が強化されることになるのであろう。

大学院時代は人骨の研究に着手した。ここでも悩みと迷いの日々だった。「骨を覗る」といっても、何をどのように見ればよいのか。しかしやり場のないような気持ちから出た問いに対して「見ていればわかるようになる」というような、禅問答もどきの答が戻ってくるだけだった。いま振り返ってみるに、たしかにその通りだった。しかし学問に王道はなくとも、少なくとも近道があつたのではないか。後進にはその近道を教え、余分のエネルギーはその先を發展させるのに費やすべきではないかと思うようになった。

ちょうどその頃、戦後以来の大学の教育・研究システムの改革がまだ尾を曳いており、日本のドイツ的な人類学に対して、戦後アメリカからの影響が大きくかぶさってきていた。そして人類学教室自体が「人類学とは何か」を問い直す転換期に立たされていた。ちょうど本研究所で設立当初、「霊長類学とは何か」と大学院生が問うたように一。筆者にはその問いの奥にあるものが痛い程よくわかった。そして筆者は真っ正面からその問いに答えてきたつもりである（京都大学霊長類研究所年報、第1巻。霊長類学入門など）。

本題に戻るが、人骨の形態学的な研究に歩を進めつつある一方で、故杉浦健一教授や祖父江孝夫氏のパーソナリティ論を伺い、あるいは新設の石田英一郎教授のゼミや精神医学の講義などにも興味をもって出席したりした。

大学院博士課程の途中で、順天堂大学医学部・解剖学教室に籍を移し、人体解剖学と骨学の講義および実習を10数年行なうことになる。その頃漠然とではあるが、日本ではヒトの研究を中心課題とする人類学で、なぜ欧米のように人間以外のサルや化石人類の研究に自由に積極的に参加しないのか、不思議に思うと同時に、不満さえ覚えるようになった。

サルの研究に着手

たまたま東大医学部資料館にオランウータンの頭骨が10数個あるのに目を付け、研究を始めた。数の不足は都内の各大学や博物館や各高校の博物館所蔵の標本資料収集で補い（34個）、その結果を人類学会にて発表した。

そのころ、日本モンキーセンターが設立され、プリマーテス研究会が発足し、多分今西錦司先生のお声がかりだと思うが、オラウータンの形態学的研究について、詳しく報告すべく基調講演者として呼ばれる。それ以来筆者の興味はいちじるしくサルへと傾斜し、長谷部言人先生収集のアカゲザル頭骨にも研究の手を延ばし、その成果を人類学会やプリマーテス研究会などで発表した。これらはすべて論文のかたちにとまとめてはあったが、いわば解剖学教室の枠外の仕事ということで投稿の許可がでず、埋もれてしまった。まだ日本では霊長類の研究はしかとした市民権を獲得していなかったのである。

当時はサルの研究分野はまさに処女地そのもの。

どのような角度からでも切り込める興味津々たるものがあった。渡辺直経・河合雅雄・江原で、ニホンザルとくに「さる廻し」のサルを使って、人類学の根本課題のひとつである直立二足歩行の共同研究を行なうことになった。科学読売から調査費をもらって、その代わり成果はまず月刊「科学読売」に掲載することになった。毎号連載で執筆し、そのなかには新しい知見も多く盛られたが、本格的な論文に仕上げることなく、筆者はドイツへ留学することになる。

これらのサルの研究を通じて、筆者は立場としては動物学的というよりも、人類学的にヒトの形質を解明することに狙いがあった。そのような時期に、たまたまドイツの伝統的な形態学雑誌にキール大学のレマーネ教授の論文が、連載の形で発表され、ドイツ形態学の空気に触れたような高揚した気持ちで、いつしかレマーネ教授のもとで学びたい気持ちになっていた。改めてドイツ語の勉強をし直し、フンボルト財団の援助によりレマーネ教授のもとへ留学することになったのである。

ドイツに学ぶ

ドイツの形態学分野では、ゲートもそうであったが、イヌもサルもヒトも形態学という手法の前では別に区別はなかった。しかし種内や種間の比較には慎重だった。日本では当時はヒトの形態学はもっぱら人類学教室の他には、医学部解剖学教室で行なわれるのが主流だった。そしてよしんば理念的にはそうではなかったとしても、現実的には種間の比較の方法がやや曖昧であった。そのような日本の空気を背負ってやってきた筆者を、レマーネ教授が徹底的に学史的・文献的に勉強し直すことを強いたのも、わりはない。

そのような数か月後、人類学教室にてフォージェル現ゲッチンゲン大学教授と机を並べることになった。そこでは「生きた全体から部分を見る形態学」が行なわれていた。今まで学んできた形態学は部分だけで完結する形態学であった。部分の形態特徴を同定し、あるいは分類することも重要ではあるが、それをもって形態学的研究は完結するわけではなく、つねに全体を認識し、全体の関係において部分を観ることの重要性を悟る（機能的形質関連性）。「全体か部分か」は古来、哲学や思想の別れるところであった。いまでは「全体でもあり部分でもあり」というケストラー式のホロ

ニックな理解が必要であると考えている。

明けても暮れてもサルの骨とのにらめっこが続く。あるとき不思議な感覚が体中を貫いた。昨日まで見えなかったものが、今日は意味ありげに見えてくるのである。骨の微細な特徴が、まるでささやきかけるように、その秘密を語りかけてくるのである。科学の世界にもこのような体験の一瞬があるものなのだろうか。それらが基になって、いくつかの論文が形態学雑誌に立て続けに発表されることになった。

いうまでもなくドイツ形態学の深層には、いわゆるドイツ的自然哲学の精神が流れている。ゲーテは千差万別の形態を示す生物群のあいだで、「変わらざるもの」「普遍的なもの」を見だし、それを「原型」とみなした。その原型こそ神の設計に基づくものであり、原型の探究はとりまなおさず神の意志や世界精神を探求する手がかりにもなる。だから、このようなことを解明し得る比較解剖は、単に分類学の一手法に留まるべきではなく、独自の目的をもった独立した学問として「形態学」と称することを提案したのである。当時のパラダイムとしては、学問はすべて神の意志や設計を明らかにすることをもって目的としていた。ゲーテのいう形態学が観念論的だといわれるのは、このような理由による。

今日の形態学では、このような観念論的な体系化は排除されていることはいうまでもないが、レマーネ教授によれば、形態学の中心課題は相同吟味に基づき各形質を同定するにあるという。かかる観点から彼は、それまでの同定の方法を徹底的に調べあげ、集大成した。その成果は、今では行動学等にも適用されている（たとえばヴィックラー）。筆者も彼の同定基準を用いて、サルとヒトを分ける形態特徴としてよく議論の対象になった前鼻棘の研究を行ったりした。しかし考えてみるに、「相同」はかくも有効であるのに対して、同じく生物界で広く見られる「相似」現象は形態学ではむしろ邪魔で夾雑物として排除されていた。しかし相似の中にも相同に劣らず生きた生物の姿がある。行動学者ロレンツは相似現象をむしろ積極的に捉えることによって成功した。海洋性哺乳類のクジラや人工物の潜水艦が、いずれもサカナに似た形態をとるのにはそれなりの意味があるというわけである。だから、行動学では相似的形質をもった動物どうしの行動を比較分析する

ことも、意外に有効である。

形態学的方法の他分野への応用可能性

生物学に限らず、民族学や考古学や社会学や言語学などでも比較や同定が要求されることが多い。形態学で樹立された比較の方法は、それらの分野での比較の方法を吟味する上でたいへん役に立つ。たとえばA地とB地でのナイフを比較するとき、いずれも刃物としての機能を利用すべく同じような形態を示す（Principle of limited probability）。だからナイフの存在や形状から両文化のあいだに交流があったか、あるいは独立に発明されたものかは決定できない（形態学のシンプレジオモルフに相当）。しかし、その柄に用いられている文様のモチーフが類似しているときには、その類似は偶然というよりも伝播による文化の交流があった可能性が高い（シナモルフに相当）。これらはまさに生物学における相同・相似の考え方とそのまま対比できよう。

あるいはまた、近代化・産業化した都市の形態は生態学的背景を異にするにもかかわらず、酷似することが多い。これらの都市形態は合理性に基づいて形成されているが、マックス・ウェーバーによれば、その合理性には目的合理性と価値合理性があり、前者は収斂し、後者は多様化する傾向を示すという。ここにいう目的合理性は形態学でいう「収斂」「相似」そのものである。

そのようなことから、「相似」の同定基準をもっと明確にすべきだと、筆者は考えているが、未だ果たしていない。

自己家畜化現象

キール大学へ留学し、研究にいそしみ、急死されたシヨイブレ教授のあとを受けて主任代理として講義を担当しているあいだ、家畜学教室のヘレ教授と出合うことになった。そして家畜化現象について論じ、人類学への概念の転用について、大きく反省する機会をえた。家畜学では「家畜化は進化のモデルにはなり得ない」「家畜化は中枢神経の低質化を伴う。だから、大脳化・新脳化の著しい人類には適用できぬ」というのが、ヘレ教授の持論である。この批判的命題を踏まえた上で、人類学での自己家畜化現象について再考察する上でたいへん役に立ったことは言うまでもない。

[この間、インドネシアやアフリカへ何度か海外学術調査に出かける機会があった。インドネシアで、インド洋の孤島であるシブルト島にわたる夜船着き場出発を待ちながら小さなケロシンランプを囲んで談笑する人たち。エチオピアのアファール砂漠で、降り注ぐ星影のもと篝火の周りで踊る人たち。言葉こそわからないが、人間どうしとして強烈な連帯感と感慨にうたれた。彼らも私も根っこで皆つながっている、という実感だった。これまで、地球上のどの人種も観念的に平等というだけでなく、互いに思いやりが必要と考えていた。しかし思いやりは上からみると発想であり、人類としての共感こそが大切だと悟ったのである。]

自然人類学からの脱皮

霊長類研究所では、設立当初から、人類の本性や由来を研究することが、中心課題の一つであった。その活動をいっそう効果あらしめるために、ホミニゼーション研究会が毎年開催されてきた。霊長類についての各分野からの最新の情報を基に人類の起源や属性について議論を重ねるうちに、人類は人類になった時点ですでに重要な人間としての諸属性が、たとえ萌芽的にしろ、ほとんどすべて形成されていることに興味を持つようになった。人類段階に到達したときには、すでに人間に向かっての助走段階を過ぎ、離陸していたと考えるようになった。つまりヒューマニゼーションこそがホミニゼーションの原因・原動力になったのであり、一般に言われるようにヒト化の後に人間化が生じたのではないということである。これをテーマに文学部哲学科で、2度にわたって集中講義を行なう機会が与えられた。

以上のことは、当研究所で現在進行している研究からも、そしてここ数年来の国際霊長類学会での成果からもすでに明らかなである。このような見解から改めて人類の進化を考察するには、系統や起源を明らかにすることも重要ではあるが、むしろレベル・アップという観点から、いつ人類レベルや人間レベルに達したかという見方も改めて重要になってくる(アナジェネシスからみた人類起源論、人類学雑誌参照)。そしてこれはグールドらの唱える断絶平衡説とは、まったく異なるものである。そして、ここでいうレベル・アップはほとんどすべて、人間性についての古典的命題の行き詰まりを霊長類学が開明してきたものばかり

である。つまり、洞察力・協力性・道具使用製作・言動能力・家族性などの属性などいずれも、実証性がなく思弁だけに基づく議論として、半ば学会ではタブー視されてきたものばかりだったが、それらすべてが霊長類の研究によってはじめて実証的に解明する糸口を見いだすことができたのである。これらの人間としての諸属性が相互触媒的にシナジー・アップして人間化が促進されてきたといえよう。そしてこれらの問題にアプローチするには、どうしても自然人類学の枠からの脱出・脱皮が必要になってきた。それはかならずしも自然人類学からの逸脱と考える必要はない。

新しい人間研究の視座

人類学が人間の当為の学でないことはいまさらいうまでもない。人類学では価値そのものを学の対象にすることができるが、人類学の立場から特定の価値の普遍妥当性を証明することはたしかに逸脱である。つまり、いかなる価値感かを吟味することは許されても、いかなる価値感を持つべきかは、人類学の外の問題であろう。しかし故石田英一郎教授も指摘したように、多くの人が、人間のかあるいは非人間的とみる事実の根底には何があるか。これは十分人類学の対象たり得るし、霊長類行動が発達し、深層心理の研究も進んできた今日、かなり説明が可能になった。

霊長類学では、常にそれを構成する個々の個別科学が、みずから備えている自己完結的な枠を越えて他と協力することが要求される。自然人類学も同様である。人類そのものを対象に据える学問である限り、これはやむを得ない。さらに自然人類学が自然科学の1ブランチとしてその枠内で成立することはいうまでもないが、「人間」に視点を拡大するとき、それだけでは完結しえない宿命を持つ。自然人類学の目を通して初めて見えてくる人間像を構築しようとするかぎり、必然的に自然人類学を超えねばならない。このようにして好むと好まざるとに関わらず、各人の人間観が形成されていく。

すでに「全体から部分を見る」ことの重要性については指摘したが、専門化が進むにつれて、北沢方邦(音楽社会学)もいうように「近代固有の文明のいちじるしい発達の場合に反比例して、われわれはますます諸事物や諸現象を総合的に把握し思考する力を失い、それらの断片の大洋のう

えで盲目的に漂流するよりほかはなくなっている」傾向が見受けられる。

思考停止がないかぎり、意識するとしないとに拘らず、いずれの科学者もそれぞれに上記のような問題を抱えていることであろう。あえて思考停止させた場合には、かつてマックス・ウェーバーが「精神のない専門人、心情のない享楽人」といい、ソクラテスが知識人と教養人を区別した、あの指摘にそっくりはまり込むであろう。つまり、専門化された特殊な分野の仕事に専心し、その分野ではこの上もなく深い知識と経験をもっているが、自分の仕事が、全体との関わりのなかで、さらにまた人類の運命にとって、どのような意味をもつのか、といったことはまったく知らないし、また知ろうとする内面的要求も持ち合わせないということになる。

石田英一郎教授も指摘しているように、「文化

というものを考えたこともない形質人類学者とネアンデルタール人の何たるかも知らない社会人類学者」が、果たしてどこまで正確に人類もしくは人間を理解することができるのだろうか、人類の理念と人間の主体制の回復がもっとも強く要請される今日、全体的人間像の学としての広義の人類学を樹立することが真の「精神を持った専門人」であり「教養人」なのではなかろうか。

そのようなことは哲学者の仕事だという国もあろうが、和辻哲郎式論法に従えば、まさに古来の哲学者が求めた「人間とは何か」の問いに、現代の科学レベルにおいて答えうるものが「人類学」ではあるまいか。冒頭でもちょっと触れたように、その答えには「その時代の全知識の断面が見える」とは、ヨアヒム・イリスの指摘である。さらにいえば「その答には、その人の全人格が投影している」ともいえよう。